

氏名(本籍)	かしむらまさみ (茨城県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博乙第2514号
学位授与年月日	平成22年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	自他への破壊的行動理解としての感情抑制に関する心理学的研究
主査	筑波大学教授 医学博士 小川俊樹
副査	筑波大学教授 博士(心理学) 濱口佳和
副査	筑波大学講師 博士(医学) 森田展彰
副査	筑波大学准教授 博士(心理学) 湯川進太郎

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、大学生における自他への破壊的行動の理解の一助として感情抑制に着目し、自他への破壊的行動が過度の抑制から生じるとする従来の因果モデルを再検討し、そこにアレキシサイミアという媒介過程を想定した新たな仮説プロセスを構築し、質問紙調査により実証的に検討した。

(対象と方法)

調査協力者は一般大学生で、講義時間中に質問紙を配布して記入を依頼し、その場で回収した。その際、調査の趣旨を説明し、調査への参加は自由意志であり、無記名回答により個人の匿名性は保護されること、回答は厳重に保護されることを紙面および口頭で説明した。また同意を得るため、調査に協力する場合に紙面に丸印を記入する欄を設けて同意を得るようにした。

(結果および考察)

感情抑制について、研究1では陰性感情と陽性感情の抑制傾向を測定する感情抑制傾向尺度を作成し、主成分分析により陰性感情、陽性感情のそれぞれに3因子を確認し、十分な信頼性や妥当性を有することが示された。また、研究2では大学生における派生的感情の探索を行い、感情抑制後に自身の評価として派生的感情が一般的に生起することを確認した。加えて、普段の感情抑制傾向は派生的感情の抑制傾向と正の関連が示し、感情の二重抑制の可能性が示唆された。そして研究3では、不快感情の二重抑制といった悪循環が不適応をもたらすことが実証的に示された。次にアレキシサイミアについて、研究4・5では既存の尺度の問題点を明らかにすることにより、新たに日本語版 Bermond-Vorst Alexithymia Questionnaire (40項目)を作成した。確認的因子分析の結果から40項目版を、そして探索的因子分析の結果から30項目版を作成した。そして、本尺度を用いてアレキシサイミアの適応的側面を検討し、研究6では感情無視から見たアレキシサイミアの適応的側面を探索し、一時的には個人を保護する機能を備える一方、その代償としてさらなる状態悪化を招くことを明らかにした。加えて、感情無視の利益とコストの認識の有無によって心理面への影響が異なることが示唆された。そして研究7ではアレキシサイミアの適応性の実証的検討を行い、状態アレキシサイミアが自己を悩ませない方向に転化させることで個人を適応へと導く可能性が明らかとなった。最後に、

研究8では本論文の仮説プロセスの実証的検討を行った。まず、自他への破壊的行動を測定する行動化傾向尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。その後、約3ヵ月間の縦断データを用いて仮説プロセスの検討を行った。その結果、構築されたプロセスは女性のみ支持され、陰性感情抑制はアレキシサイミアの認知的要素を規定し、その認知的要素によって自他への破壊的行動へ至るという仮説に一致した結果が得られた。一方、男性では認知的要素が陰性感情抑制を規定しており仮説とは異なる結果が得られた。また、陽性感情抑制に関しては男女ともに認知的要素によって陽性感情抑制が規定される結果が示された。アレキシサイミアの情緒的要素に関しては、男女ともに感情抑制や行動化傾向とは関連が見られなかった。以上のことから、従来提唱されている感情抑制から自他への破壊的行動へというプロセスよりも、媒介課程としてアレキシサイミアを想定した新たなプロセスにより、大学生における自他への破壊的行動への理解の一助となる知見が提供されたと考えられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、感情の抑制が一定水準を超すと破壊的行動をもたらすという従来の直線的因果モデルに疑問を呈し、質問紙という研究手法により、アレキシサイミアという媒介過程を介させたモデルの方が説明に富むことを実証的に確かめた点で高く評価できる。しかし、本研究の調査協力者が一般大学生であり、破壊的行動という研究対象の性質を考慮すると、生態学的妥当性には疑問も残る。今後調査対象を広げての検証が必要であろう。また、破壊的行動を質問紙法という意識的レベルでの測定に終わっている点も、今後の課題として残されている。

しかしながら、論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。